

バレーボールのレシーブ時における「見るところ」の変容

○後藤浩史 (愛知産業大学), 石垣尚男 (愛知工業大学), 川岸与志男 (岐阜大学),
吉田 正 (愛知教育大学), 氏原 隆 (中京女子大学)

キーワード: バレーボール, レシーブ, 視覚情報, 着目点
成長過程

【研究目的】

バレーボールに限らず, 球技において, 視覚情報はプレーの重要な要素である。視野に入ったものは, 見る意識があれば非常に多くの情報があるが, 脳に入る情報は注意を向けたものだけである。パフォーマンスアップを図るためには, どこに注意を向ける必要があるのかが重要となる。

プレーに対する予測は, 見て動く処理と, 経験等によって培われた構造化された知識によって, 動くためにどこを見るべきかを判断する処理の相互作用によって生み出されるといわれる。指導者等の熟練者は構造化された知識に基づいて, 「よく見ていけ」と指示するが, 構造化された知識を持たない未熟練者には, 見るべきところの判断能力に欠けるため, 必ずしも効果的な指示にならないことがある。

重要なのは予測のためにどこを見るのかということである。そこで本研究では, レシーブ実施時の選手の「見るところ」について, その成長過程における変容を検討し, 着目点の共通点, 相違点を明らかにすることを目的とした。

【研究方法および対象】

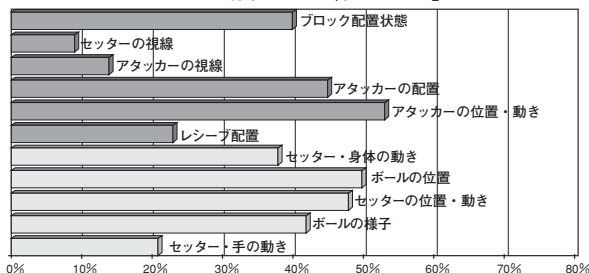
被検者は中学生男女385名, 高校生男女315名, 大学生男女491名で, 質問紙によるアンケート法にて実施し, 集計した。分析は多変量解析法における数量化理論 (主として数量化Ⅱ類) を用いた。(実施期間: 平成11年6月~平成12年1月, 回収率: 92%)。

【結果及び考察】

1. 相手のレシーブ局面: レシーバーからセッターにボールが入る「レシーブ局面」では, ボールの位置, 様子等のボール情報, およびセッターの身体の動き, 位置・動き, 手の動きなどには有意な差がみられなかった。

セッターの視線, およびアタッカーの位置・動き, 配置, 視線は大学生が中高生に比べて見ている割合が有意に高かった。

レシーブ局面における「見るところ」



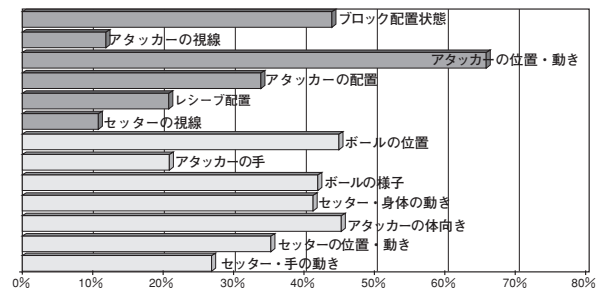
2. 相手のトス局面: セッターからアタッカーにボールが当たる「トス局面」では, ボールの位置, 様子, およ

びアタッカーの手は中学生が見ている割合が高いことが示唆された。

セッターの身体の動き, 位置・動き, 手の動き, およびアタッカーの身体の向きには有意な差がみられなかった。

セッターの視線, およびアタッカーの視線, 位置・動き, 配置は大学生が見ている割合が有意に高かった。

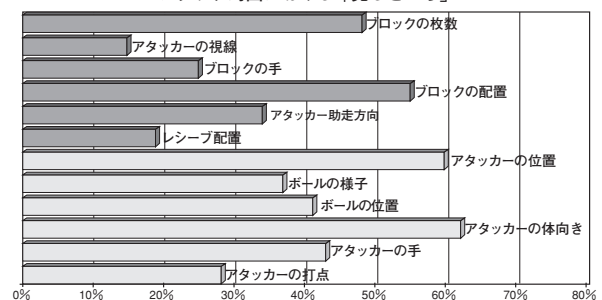
トス局面における「見るところ」



3. 相手のアタック局面: アタッカーがスパイクを打とうとする「アタック局面」では, ボールの位置, 様子, およびアタッカーの位置は中学生が見ている割合が有意に高かった。

アタッカーの身体の向き, 手, 打点は有意な差がみられなかった。それに対して, アタッカーの視線, 助走方向に関しては大学生が見ている割合が有意に高かった。

アタック局面における「見るところ」



【まとめ】

全ての局面において, ブロックの配置状態, 枚数, 位置, 手は中学生, 高校生, 大学生と年齢が上がるにつれて, より多くみていることが示唆され, また, レシーブの配置に関しても, 全ての局面で大学生が中学生に比べて見ている割合が有意に高く, ネットのこちら側の情報に年齢・経験による変容が示唆された。

それぞれの局面で, プレーをしようとするプレーヤーの基本的な情報には有意な差が見られず, ボール情報に関しては中学生が見ている割合が有意に高かった。それに対して, 次にプレーするプレーヤーの情報, また, プレーをする選手の視線など, 高度な予測に必要な情報は, 大学生が見ている割合が有意に高かった。